

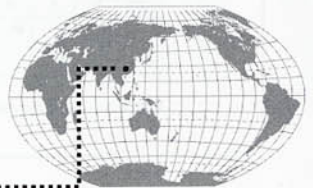
中国収集

工作的三大原則

塚田誠之（つくだまこと）
先端人類科学研究部



景彩山からみた桂林の街並み。2004年9月撮影



其の一 適正価格を知る可し

桂林の名所の奇峰の一つに景彩山（けいさいざん）というところがある。切り立った岩山に階段がつくられており、頂上にはのぼると桂林の景色を一望することができる。急斜面の階段を上ると汗が噴きだしてくる。山を下りたところには土産物や飲み物を買う店や屋台が並んでいる。そこに、リヤカーでライチを売るおじさんがいて、片言の日本語を使って「ヤスイヨ」と日本人とおぼしき観光客に声を掛けていた。それが一粒、一〇元（約一三〇円！）。市場に行くと一粒ではなく優に一房は買える金額だ。おじさんはわたしにも声を掛けてきたが、実勢価格を知っているわたしは買う気はなかった。試しに値切ってみようと思った。しかし、おじさんは実にしごとく値切りに応じない。そのうちに別の日本人観光客が来たのでおじさんはそちらにターゲットを変えた。中国ではモノの値段交渉はかように精力を使う仕事なのだ。

ライチ一粒だけならともかく、数百点もの標本資料になると価格の交渉だけでたいへんな労力が必要だ。こちらは一定の時間内で仕事をすませなければならぬが、先方は時間の制約がない。かくして先方は少しでも高く売ろうとねばることになる。しかも、市場価格のわかる商品ならともかく、少数民族地域の農民の家でなにかを買うときは価格自体がわからない。また、はじめてで事情がわからない場所に外国人が二人で入ると村人に疑われて公安に目を付けられる危険性もある。そもそも、とかく保守的な農民は初対面の見知らぬ外国人に容易にモノを売らないし、また農民が経済に「目覚め」てきている最近では、エスニックなもの人気が高まりともあいまつ、とくに観光地やその近くでは外国人とみるとかえって法外な値段で売られてひと儲けしようとする場合もある。

其の二 事前調査と現物確認を怠る可からず

かに農村でモノを買ったとしても、それらを通関させるのはまたたいへんだ。しかも、博物館や研究所がその資料を「文化用品であつて商品でない」旨を証明してくれる書類や、中国が輸出を禁止しているものではないという文物局による鑑定書類が必要だ。少数民族女性の



少数民族民族の服装用品店。2003年8月、四川省西昌市にて



少数民族ミャオ族女性の盛装したところ。銀製装身具がうつくしい。2001年10月、貴州省畢節市にて

1994年1月1日に廃止された「外滙兌換券」、おもに外国人が使用していた



宮が資料の収集を代行しておこなうシステムをとっていた。

当時は改革開放政策がとられ始めてまだ日も浅く、資料を現地で購入するどころか調査に入ることもさへも困難



2003年8月、四川省嘉徳県の漆器製作工場にて

な時代で、中央の政府機関に収集を依存せざるを得なかった。そもそも民族文化宮に依頼することになったのも当時の國務院副総理の口利きによる

其の三 友との交誼を育む可し

わたしは収集に関わりはじめた一九八〇年代末のころは、まだ輸送体制に不安があつて日本の港にすぐまでは心配だった。契約にもついて仕事をするとまた、お役所仕事のなところもあつて、就労時間が終わると、重要な作業の途中でも「今日の仕事は終わり」ということもあつた。八〇年代のように国営商店の店員が堂々

と客の前で居眠りしていたり、人びとが店で買物をするにもバスに乗るにも並ばずに先を争うたりといった見苦しい光景はさすがになくなったが、それでも九〇年代前半の頃は効率の悪さと不安から、収集に行くつと胃潰瘍や胃炎を患って帰国後に病院通いをしたものだった。北京では宴会に必ず出席する六〇度近い焼酎も、弱た胃に追い討ちをかけた。しかし、九〇年代後半以降になると、地方でも収集できるようになった。中国は経済的な発展を遂げるにつれて、大都市では契約の觀念も根付き、輸送面でもほとんど心配することがなくなった。一九九三年までは二重価格制度をとっており、外国人が銀行で両替すると「外滙兌換券」という専用の紙幣を手にしたが、それは農村では通用しない代物だった。私的な旅行で小遣い銭程度なら友人と換える方法もあったが、公務の場合はそうはいかない。それも人民元に一本化されて便利になった。わたしの胃も痛むことが少なくなった。

中国での収集を通じて痛感するのは人間関係の重要さである。中国では、友人や知り合いの人のネットワークを重視する国民性がある。一旦相手を信用すると、体を張って仕事に協力してくれるところがある。収集した資料の登録作業をしていたとき、夜遅くまで手伝ってくれたこと、友人の頼みだからというこで、文献の収集の際に、残業どころか一晩かけて数千枚以上も複製してくれたこと、一緒に残業し夜食をとっていただいたこと、「寝酒に飲め」といってケースごと缶ビールを差し入れてくれたことなど、友人から受けた好意は数知れない。そうした友人たちが各地にできた今、わたしの中国通いはまだ終わりそうにもない。